

研究結果

本研究は主にアンケート調査を通して、文章における連体修飾節「という」の機能を確認し、中国人中上級日本語学習者の習得実態と使用意識を把握した。学習者の「という」の誤用傾向をもっと詳しく考察したところ、主な結論は次のような点がある。

全体的にいうと、「という」の介在が不可能である場合は、義務とされる場合の誤用率より低いということがわかったが、やはり助詞「の」や「というの」との混同が考察された。そして、同じ文の中に「という」の介在の有無によって、文の意味の相違を判断してもらったところ、大部分の学習者が正しく答えたが、20%ぐらいの人が間違えてしまった。第二、半分以上の人が普段、気を配ることがあまりないと答えた。しかし、「という」の使い方がとても重要で、文章全体の自然性に関わっているという認識を持ち始める学習者が半分を占めた。

原因について、考察してみたところ、おそらく中国語の影響、つまり学習者母語の転移のことが一因だろうと考えられる。そして、中日両言語を相互対比しながら、以下のようにまとめてみた。(1)「という」介在必要な場合と不可能な場合の対訳の中国語はほぼ同じで、中国語の「的」に訳された例が多い。そのため、中国人学習者が混乱してしまうことが、「という」の脱落と付加の一因であると考えられる。そして、介在任意な場合では、特に、修飾語が複雑な構成の場合、「定语」(連体修飾語)と中心語の間を「的」でつなぐのではなく、「这一」でつなぐことにより、「という」の意味を持たせることが適当であろう。しかし、学習者たちがそれを意識していないことが、「という」の脱落や付加の一因であると考えられる。それから、日本語科の学生を対象に編まれた教科書のほとんどは「という」の介在の問題について、説明していないことも判明した。

今後、教授法を改善するにあたって、まず、「という」の重要性と豊富な機能を教える必要があるだろう。また、「という」介在必須の時、介在自由の時、介在不可能の時の制限などを学習者に理解してもらったほうが良いと考える。それに、中国人学習者に対しては、特に翻訳するときの注意点も説明したほうが有効であると思う。また、教科書においては、「という」に関する解説の内容も改善する必要があるだろうと思っている。

研究成果の公表について(予定も含む)

口頭発表 (題名・発表者名・会議名・日時・場所等)

題名：＜連体修飾節「という」の誤用傾向の調査と原因分析—中日対照の立場から＞

発表者：楊紅・万小瑜

会議名：第1回漢日対比言語学研究大会

日時・場所：2009年8月30日 北京大学(中国)

論文 (題名・発表者名・論文掲載誌・掲載時期等)

書籍 (題名・著者名・出版社・発行時期等)